

平成 30 年 5 月 27 日現在

機関番号：32404

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16772

研究課題名(和文) 節と名詞句における省略と文法格の役割に関する比較統語論研究

研究課題名(英文) A Comparative Study of Clausal and Nominal Ellipsis and the Role of Grammatical Case

研究代表者

瀧田 健介 (TAKITA, Kensuke)

明海大学・外国語学部・准教授

研究者番号：50632387

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、比較統語論の観点から、節と名詞句における省略現象に関する経験的事実を詳細に検討し、省略現象に課される様々な文法的制約の解明を目的とした。具体的には、英語タイプの言語において主に研究されてきた先行詞包含型省略が日本語の節を対象とする項省略においてみられること、また態の不一致現象を日本語タイプの言語において検証する際に名詞化節における名詞句内削除を考察することが有効であることを指摘し、これらの観察から省略における並行性および同一性条件に関する新たな論拠を提示した。また、省略における文法格の役割に加え、統語構造の線状化に関する新しい理論を発展させることができた。

研究成果の概要(英文)：This study aims at examining clausal and nominal ellipsis phenomena from a perspective of comparative syntax, and revealing the nature of the constraints imposed on them. To be more concrete, I have found that clausal argument ellipsis allows us to show that Japanese does have antecedent-contained deletion, which has been discussed mainly in English-type languages. I have also pointed out that ellipsis applied to nominalized clauses helps to explore the voice-mismatch phenomena in languages like Japanese. Together with these empirical results, I have argued that the general constraints on ellipsis, for instance the parallelism constraint, receive a new piece of evidence from Japanese, and that the nature of the identity condition between an ellipsis site and its antecedent is syntactic rather than purely semantic. As for broader implications, this study has contributed not only to clarify the role of grammatical Case in ellipsis but also to lead to a new theory of linearization.

研究分野：理論言語学

キーワード：統語論 省略現象 並行性条件 同一性条件 態の不一致 文法格 線状化

1. 研究開始当初の背景

自然言語には、文中あるいは談話中において同じ情報が繰り返される場合、その部分を顕在的に表さない、省略と呼ばれる現象がある。様々な言語で観察されるこれらの省略現象が提起する最大の問題は「省略部分は実際に知覚できないにもかかわらず、なぜその言語の母語話者はそれに一樣の解釈を与えることができるのか」というものである。生成文法の枠組みでは、「ヒトに内在する言語知識がこれを可能にしている」という仮説をたて、その特性を詳細に検討することでこの問題を解決しようとする試みがその最初期から現在に至るまで精力的に行われている。また、省略部分は直接知覚できないため、その諸性質を生後接する言語経験から直接獲得することは不可能である。従ってその諸性質は言語知識の初期状態である普遍文法の性質を強く反映していると考えられており、個別言語の詳細な検討及びそれに基づく比較統語論が非常に重要な役割を担ってきた。

このような背景のもとで、以下の(A)・(B)の二つの問いを中心的に取り上げ、個別の研究課題を並行的・有機的に関連させることで、(i) 省略現象そのものに関するより深い理解を得るとともに、(ii) 各個別言語の言語知識の内容及びその背後にある普遍文法の解明に取り組むことを目指した。

- (A) 省略が可能となる統語論的環境とは何か
(B) 省略される要素とその先行詞の「同一性」はどのように定義されるべきか

さらにこれらの成果から、より深い問題である(C)の問題に対する貢献を目指した。

- (C) ヒトの言語知識はなぜそのような性質を示すのか

個別の研究課題としては、研究代表者が博士論文 (Takita 2010)以降取り組んできた間接疑問不定詞における省略現象に関する研究を進展させることと、Takita & Goto (2013a,b)において行った後置詞句内の N'削除の成果に基づき、英語などの言語での前置詞句内での N'削除との比較を通じて(A)、(B)の問題について新しい視点から貢献することを目指した。また、間接疑問文省略に関する成果と N'削除に関する成果を比較・統合することで省略現象に関する理論の文法全体における位置づけをより明確にすることを目指したが、これは、先行研究においては間接疑問文省略と動詞句省略の比較は多く行われており、その相違点が比較的明らかになってきているが、N'削除に関してはそのような他の省略現象との比較はあまり行われていないという問題意識に基づくものであった。

2. 研究の目的

本研究では、近年通言語的に研究が進めら

れている「省略現象」について、日英語の言語事実の詳細な検討及びその他の諸言語との比較を通じて新しい理論・分析を提案することによって、理論言語学の中心的課題の一つである「ヒトの言語知識の解明」に貢献することをその目的とした。特に、まだ研究がそれほど進んでいないと思われる不定詞節における間接疑問文省略及び名詞句内での省略を詳細に検討し、さらに省略に課される一般的制約としての「同一性条件」を、「文法格」という一見省略とは関係が薄いように思われる理論的観点から検討することで、省略現象のみならず、文法格を含む文法理論全体に対しても新たな視点をもたらすことを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、省略現象に関する諸問題に取り組むため、英語及び日本語を中心とした個別言語の詳細な検討及び言語間の相違点を比較・検討する比較統語論の手法を用いてデータの収集・整理及び検討を行った。特に、経験的考察の中心である間接疑問文省略及び N'削除について先行研究において観察されている事実を踏まえ、各言語の母語話者に対して聞き取り調査などを行うことでデータを収集した。また、各年度ごとに4週間程度、理論言語学・比較統語論研究が精力的に行われている米国コネティカット大学言語学科での短期訪問調査を行い、研究発表および個別のアポイントメントなどを通じて経験的・理論的により綿密な議論を行った。

4. 研究成果

平成 27 年度の研究成果として、これまで主に英語の動詞句省略を中心に研究されてきた先行詞包含型削除と呼ばれるタイプの省略が、日本語などに空項現象という動詞句省略とは異なるタイプの省略現象においてもみられることを発見したことが挙げられる。(「5. 主な発表論文等」における雑誌論文、および学会発表、)

特に、副詞節内部の補文節が主節全体を専攻して省略されうることを、省略現象一般にみられる並行的解釈の効果などに基づいて示した。さらにこのことが空項現象を動詞句削除によってのみ説明しようとする分析にとって深刻な問題となることを指摘し、近年提案されている項省略という操作を動機づけることができることを論じた。また、省略現象に課される文法的制約である同一性条件に関しては、主節全体と省略される補文節が異なりうることを指摘し、その理論的含意についても論じた。

平成 28 年度は、統語構造の線状化について研究を行い、その成果を助詞残留省略と呼ばれる名詞句レベルでの省略現象に適用する際に、文法格が大きな役割を果たしていることを論じた。(「5. 主な発表論文等」における学会発表、)

特に、統語的構築物のラベル付けという最近の理論言語学研究において大きな注目を集めている問題について、ラベル付けは統語構造の線状化のために必要であるという仮説を提案した。また、この仮説にもとづいて助詞残留省略および日英語の難易構文について新しい分析を提案した。

平成 29 年度は、引き続き同一性条件に関して研究を進めた。特に、この条件が純粹に統語的に定義されるべきか意味的に定義されるべきかという理論的問題に日本語の分析から実質的な貢献をするために、英語などの言語においては節レベルの省略現象にもとづいて研究されている態の不一致現象を、日本語の名詞化された節における N' 削除から検証することの重要性を論じた。「5 . 主な発表論文等」における学会発表 (, ,)

補助期間全体を通じては、不定詞節における間接疑問文縮約に関する研究はあまり進展しなかったが、これまで比較的研究の蓄積のなかった名詞句レベルの省略現象については様々な理論的・経験的成果があった。また、当初の研究目的の射程に入っていた文法格だけでなく、統語構造の線状化と省略現象を関連付けることができるという成果も得られた。

< 引用文献 >

Takita, Kensuke (2010) Cyclic Linearization and Constraints on Movement and Ellipsis. Ph.D. dissertation, Nanzan University.

Takita, Kensuke, and Nobu Goto (2013a) On (Im)possible N'-deletion within PPs. *Nanzan Linguistics* 9, 215-231.

Takita, Kensuke, and Nobu Goto (2013b) Some Asymmetries in Japanese N'-deletion and their Theoretical Implications. In Uli Sauerland and Kazuko Yatsushiro (eds.), *Proceedings of the Formal Approaches to Japanese Linguistics* 6, 215-225, MITWPL, Cambridge, MA.

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

Kensuke Takita (to appear) Parallelism and Antecedent-Containment in Clausal Argument Ellipsis, *Proceedings of Workshop on Altaic Formal Linguistics 11*, 査読有, MITWPL, Cambridge, MA.

https://drive.google.com/file/d/0B5wJQ_jRB_L-bYm1CN2pFd1lveHM/view

Kensuke Takita (2018) Antecedent-Contained Clausal Argument Ellipsis. *Journal of East Asian Linguistics* 27, 1-32, 査読有.

DOI: 10.1007/s10831-017-9165-x

[学会発表] (計 13 件)

瀧田 健介 (2018) Voice-Mismatches in Japanese: A View from *Kata*-Nominals, 慶応レキシコン研究会, 慶應義塾大学.

瀧田 健介 (2017) ラベル付けに基づく転送領域の可変性に関する分析とその帰結, 日本英語学会第 35 回大会ワークショップ[®] 極小主義統語論における外在化[®], 東北大学.

Kensuke Takita (2017) Voice-Mismatches under N'-Deletion in Japanese, New York University Syntax Brown Bag, New York University.

Kensuke Takita (2017) N'-Deletion and *Kata*-Nominalization in Japanese, University of Connecticut LingLunch, University of Connecticut, Storrs.

Kensuke Takita (2017) A Labeling-Based Approach to the Variability of Spell-Out Domains and Its Consequences, Comparative Syntax and Language Acquisition (CSLA) #7, 南山大学.

瀧田 健介 (2016) ラベル付けと書き出し領域の可変性, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語から生成文法理論へ: 統語理論と言語獲得」第 1 回ワークショップ, 国立国語研究所.

Kensuke Takita and Nobu Goto (2016) Labeling and Tough-Movement, The 24th Japanese/Korean Linguistics Conference Satellite Workshop “Addressing Classic Issues on Movement and Its Locality in Japanese and Korean under the Current Minimalist Framework,” 国立国語研究所.

Kensuke Takita (2016) Labeling for Linearization, New York University Syntax Brown Bag, New York University.

Kensuke Takita (2016) Labeling for Linearization, University of Connecticut LingLunch, University of Connecticut, Storrs.

Kensuke Takita (2015) On Null Clausal Arguments in Japanese, New York University Syntax Brown Bag, New York University.

Kensuke Takita (2015) Antecedent-Contained Clausal Argument Ellipsis, University of Connecticut LingLunch, University of Connecticut, Storrs.

Kensuke Takita (2015) Parallelism and

Antecedent-Containment in Clausal Argument Ellipsis, Workshop on Altaic Formal Linguistics 11, University of York.

瀧田健介 (2015) Labeling and Linearization, 日本英文学会第 87 回全国大会ワークショップ “Examining the Basic Assumptions on the Architecture and Operations of Language Faculty: From the Perspective of the Strong Minimalist Thesis,” 立正大学.

〔その他〕

ホームページ等

<https://sites.google.com/site/kensuketakitaling/home>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

瀧田 健介 (TAKITA, Kensuke)
明海大学・外国語学部・准教授

研究者番号 : 50632387